

生体肺中葉移植手術の様子



TOPICS
Okayama University

世界初 生体肺中葉移植に成功

3歳の男児に母親の肺の「中葉」部分を移植

岡山大学病院は7月1日、重い肺の病気に苦しむ3歳の男児に、母親の肺の「中葉」部分を移す生体肺移植を実施し、無事成功した。生体肺中葉移植の成功は世界初で、同時に国内最年少患者への肺移植となった。今回の手術の背景には、改正臓器移植法施行後3年たった

今も、15歳未満の脳死ドナーが2人しか現れておらず（手術実施時点）、脳死移植の可能性は低いという状況がある。そのため、担当医が男児の両親と話し合い、生体肺中葉移植に臨んだ。通常、生体肺移植は肺活量の多い「下葉」部分で行うが、体の小さい子どもにとって大人の「下葉」は大きすぎることが多く、「下葉」よりも小さい「中葉」を使うことでこの課題をクリアした。手術後、男児は大好きな新幹線のおもちゃで遊んだり、たこ焼きを頬張るなど、順調に回復し9月26日、無事退院した。

執刀医の大藤剛宏呼吸器外科准教授は、「この手術の成功は今まで体が小さすぎて移植をあきらめていた多くの子どもたちを救う道しるべとなった。今後は移植を希望するすべての子どもたちの命を救えるよう全力を尽くしたい」と話している。

文部科学省の「研究大学強化促進事業」の支援対象機関に8月6日、岡山大学が選定された。本事業は、大学等における研究力強化を促進し、世界水準の優れた研究活動の支援を目的に、今年度から始まる事業で、岡山大学を含め22の「リサーチ・ユニバーシティ（研究大学）」を選定。選定された機関は今年度から10年間、本事業の支援を受ける。

TOPICS 「研究大学強化促進事業」支援対象機関に選定

世界で戦えるリサーチ・ユニバーシティを目指す



▲研究大学強化促進事業の支援対象機関に選定された岡山大学

文部科学省 研究大学強化促進事業：
http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/sokushinhi/1338460.htm

岡山大学病院が新生生前診断実施施設に認定

中国地方初 7月から実施

TOPICS
Okayama University



▲遺伝子カウンセリングを行う担当医

岡山大学病院は6月26日、妊婦の血液で胎児の染色体異常を調べる新しい出生前診断の実施施設に中国地方で初めて認定された。臨床遺伝専門医の資格を持つ産婦人科医師と小児科医師らが担当し、7月11日から診断を開始した。

新しい出生前診断は、母体血中のDNA断片の量の比から胎児が染色体異常をもつ可能性を示す非確定的検査だが、血液だけで簡便に検査できるため、妊婦が検査の意義や結果の解釈を十分に理解しないまま診断を受けることがないよう、検査前と検査後に十分遺伝カウンセリングを行う必要がある。岡山大学病院では、診断対象を①胎児が

岡山大学は、地域・社会から必要とされる大学に発展していくため、学生や若手教職員の意見を大学運営に反映する「学長と学生・若手教職員との対談」を企画し、8月5日、第1回目として森田潔学長と学部生が教育・研究の現状と課題について対談する「学長と学生との対談」を本部棟で開催した。



▲学長と学生の対談会場の様子

「学長と学生の対談」を開催

学生や若手教職員の意見を大学運営に反映

TOPICS
Okayama University



▲課題や要望を述べる学生

全11学部1コースから13人が出席。許南浩企画・総務担当理事をファシリテーターに、学生らが日ごろ考えていることや自身の学部・コースの紹介、本学の良い点、本学への要望など活発に意見を述べた。図書館の開館時間延長や取得可能単位の上限緩和、学部間の交流強化、留学手続きの統一といった要望に、森田学長と許理事が丁寧に回答し、今後の検討事項や課題も明らかになった。「これから日本の中で、岡山大学はどんな存在になるのか」という質問に、森田学長は「教育、研究、外部評価、国際すべてに注力し、世界大学ランキングで100位以内、日本では10位以内に入るような、世界でも地域でも存在感のある大学を目指す」と力強く答えた。



バスで多くの高校生が来学
(理学部付近)

TOPICS

Okayama University

オープンキャンパスを開催

高校生らが岡大体験



▲大学生に学生生活や勉強について質問する高校生

岡山大学津島地区と鹿田地区で8月9、10日、「オープンキャンパス2013」が開催され、全11学部1コースで模擬授業や個別相談、実習体験、研究室見学といった多彩なイベントが開かれた。

9日は、岡山県内外から高校生や保護者ら約1万人が参加。各学部の説明会をはじめ、女子学生と女子高生との交流パーティや大学の教科書を試し読みできるコーナー、本学学生が製作したゲームやアプリを体験できるコーナーもあり、高校生らは興味を持った学部を足運び、在学生と交流するなど、岡山大学の雰囲気を楽しんでいた。

全体説明会では、森田潔学長が本学の魅力をアピール。本学学生が受験勉強のやり方や学部選択について自分の体験を話し、高校生らは真剣な表情で聞いていた。

アフリカ地域の教育関係者が 附属小で実践授業

子どもたち「やる気出た」

TOPICS

Okayama University

▼熱心に授業をするアフリカ地域の教育関係者



岡山大学で、アフリカ地域の初等理科教育の質の向上を目的とした研修に参加していた同地域の教育関係者12人が9月3日、岡山大学教育学部附属小学校で算数と理科の実践授業を行った。

教育関係者らは、分数や燃焼、光合成を学ぶ6年生の授業を担当。アフリカの子どもの好きなゲームを紹介して導入部分から授業に引き込み、「授業のめあて」を自分で考えさせるなど、学習者中心の授業を展開した。

通訳を介して英語で授業を受けた子どもたちは、「言葉はわからなくても授業はわかりやすかった」、「発表に明るく応えてくれ、やる気が出た」など、普段と違う授業に顔を輝かせていた。

教員が一方的に教える詰め込み型の授業が多いアフリカ地域から来た教育関係者らは、約2カ月間の研修で同小学校の授業を見学し、教員の発問や授業運用を研究、分析。本学教員の指導を受け、来日前に作成した指導案を改善し、実践授業に臨んだ。

岡山大学と財団法人津山慈風会・津山中央病院は7月26日、「岡山大学・津山中央病院共同運用がん陽子線治療センター」を津山中央病院敷地内に開設し、平成28年3月の開業を目指すと発表した。陽子線や重粒子線などの粒子線治療を行う施設は現在、全国で11施設のみで、本センターが完成すれば、中四国地方初の粒子線治療施設となる。

同日行われた記者発表で、岡山大学の森田潔学長と財団法人津山慈風会の浮田芳典理事長は「今後の医療や保健サービスの方向を広げる取り組み。本センターの開設で岡山県の医療産業都市化を推進し、県北部の活性化にも貢献したい」とあいさつ。岡山大学病院の金澤右副病院長が本センターの概要について詳しく説明した。

がん治療では電磁波のX線を用いた放射線治療が主流だが、粒子線は腫瘍に集中して照射することができ、周辺の正常な臓器への影響が少ない利点がある。今後、がん患者の半数程度がこうした放射線治療を受けることが予想され、本学でも導入を検討していたところ、津山中央病院から



▲開設を発表した森田学長（左から3人目）と浮田理事長（左から4人目）ら



▲「がん陽子線治療センター」の完成予想図

陽子線治療センター開設への協力依頼があり、本学と同病院が共同運用することになった。

津山中央病院は本学に寄付講座「陽子線治療学講座」を設置し、同講座の教員を中心に同センターでの診療や研究、人材育成を行う。また、岡山大学病院は「陽子線治療外来」で広く患者を受け入れ、同センターと患者を結ぶ。

TOPICS

Okayama University

「がん陽子線治療センター」開業へ

津山中央病院と共同運用

宇宙を旅したヒマワリ種子 小中学校に引き渡し

ロシア国際宇宙教育実験参加の杉本准教授

TOPICS

Okayama University

ロシアの「Bio-MI ミッション国際宇宙教育実験」に日本側コーディネーターとして参加している岡山大学資源植物科学研究所の杉本准教授は7月10日、宇宙を旅したヒマワリ種子を笠岡市の大島中学校に届けた。

同実験は、笠岡市と浅口市の小中学生が準備したヒマワリの種子をロシアの無人宇宙船「Bio-MI」に載せ、1カ月間地球軌道上を周回。帰還した種子



▲植木鉢にヒマワリ種子を植える生徒ら

を栽培し、宇宙環境が種子の生存や成長に及ぼす影響を観察するもの。

同日、大島中学校を訪れた杉本准教授は、生徒を前に同実験の目的や宇宙植物科学研究の意義について話し、宇宙から帰還したままの状態に密封されたヒマワリ種子約70粒を生徒代表に手渡した。生徒らは早速引き渡された種子を植木鉢に植え、水やりを行った。

日本からは他にも同市の中央小学校と浅口市の寄島小学校が参加。寄島小学校には11日にヒマワリ種子を届けた。実験に利用したBio-MIは2013年4月19日、カザフスタン共和国のバイコヌール宇宙基地から打ち上げられ、5月19日、地上に帰還した。